

# 有珠山噴火

## 湖畔に響く地鳴りの恐怖

亀谷 隆



「岡持」  
大正末食物を入れて持ち運ぶ桶で、蓋と手が付いており、昭和30年頃まで使われた。  
版画・谷口二郎（札幌）

### ★湖に浮く中島

昭和52年（1977）の春先であった。職場に虻田町教育委員会の課長と係長が訪ねてきて「洞爺湖の中島にある森林博物館を改修整備したいが、どうすれば良いか」との相談であった。

大方の話を聞いた末、「明日、現地に行って状況を調査します」と返事をすると、「えっ！明日ですか？」との驚きに対し、「何か不都合でもありますか？」と聞き返すと、「急なのでびっくりしたんです」とのこと、「来月も明日も調査は同じですよ」と虻田町に翌日調査に出向いた。

昨日の今日なので、課長はじめ係員はてんでこ舞いの様子であったが、すぐに中島までの船を用意してくれた。

用意された船は多数の客を乗せる遊覧船で、何とも一人貸切りとでもいう思いで「遊覧船でなくても」と遠慮して話すと、船長からは「どうせ、シーズンへ向けての試運転なので」との返事が戻ってきた。

森林博物館は、昭和29年（1954）に函館市で開

催された北洋博覧会で展示された森林標本や模型を転用して、同年に道立博物館として開設され、昭和37年（1962）に町に移管された施設である。

建物は木造モルタル造りの平屋で、部分的に補修しており、電気は自家発電機で供給している。

展示されている鳥類などの剥製は、ガラスケースに入れてはいるが、結構な埃が付着していた。それに比べ、樹木標本類は露出しているが気にする程の損傷は少なかった。

一通りの調査を終えて、課長より整備の概要を聞いた結果、整備の予算は十分でないので、手作りで整備したいとのことである。

### ★急ぐ時は急ぐ、それ以外はゆっくりと

その後、整備日程に合わせて開始することにし、ジーンズの上下作業服と作業靴を身にし、工具箱をぶら下げて虻田町に出向いた。

役場に到着すると、課長と係長が作業の日なのに背広を着ていたので「素敵な背広なのでペンチで袖を引き抜きたいんですが？」と言うと、慌てて作業服に着替えて来て「少し、ゆっくりとやりませんか？」との問いなので、「早くやれば、後は楽ですよ、それでなくても遅れてしまうのが常ですから」と経験からの返事をし、作業に取り掛かり、結果として予定より半日早く作業を終えることができた。

整備が終了し、温泉につかって反省会が開かれた時、課長の「お陰様で、より早くというのが身に染みしました」との挨拶に対し、「私は、名字が亀なので、兎よりも早く歩かないと目標まで行けないんです。誠に迷惑を掛けました」と謝罪したら、「いや、いや、兎にも角にも手早い仕事には感服しました」とのこと一件落着した。

この整備を契機に、虻田町との付き合いが続き、郷土資料館の開設にも協力を求められ、さらに、町長を中心とした「虻田メルヘンの会」の会員として選ばれ、虻田町についての提言を交わしていた頃、昭和52年（1978）8月7日午前9時12分、32年間の沈黙を破って有珠山が噴火した。すぐに、博物館と資料館の被害が気になり連絡した結果、被害がないとのことであった。

噴火も落ち着いたその年の暮れ、課長より「明日、相談があるので虻田町に来てほしい」との電

話連絡があり、翌日訪ねた。

その相談は、虻田地区労や校長会など5団体で組織した「洞爺湖温泉の復興をすすめる会」が火山科学館を設置すべく、科学館推進委員会を発足させたので、その指導と助言の役を引き受けてほしいとのことであった。

町長からも重ねての願いであったので、引き受けることにし「設置審議議会」や「専門委員会」を新たに組織し、有珠山噴火を軸とした火山科学館構想を作成、郷土資料館に併設して昭和53年(1979)4月に開設することにした。

開設した当日、課長や係長らとで反省会を開いた時、課長が「中島のときの“急ぐときは急いで実行する”という教えは、噴火での被災者を非難させた時に痛烈に感じました。例えば、体育館で被災者のプライバシーを守る最小限度の手段として、針金を張って、旅館やホテルの敷布をカーテンした仕切りは、中島での最小限度という作業で覚えました」と話し、お礼の代わりなのか？何度も杯に酒を注がれた。

### ★自然の猛威には勝てず

火山科学館は、修学旅行をはじめ多くの団体客が、有珠山での噴火の様子を見たり、知ったり、体験することなどができ、虻田町民が噴火から立ち直った象徴でもあった。

そんななか、この年の10月に大雨が降り、泥流が科学館を直撃し、建物の壁を破って、噴火体験室他の展示室が泥流で覆われてしまった。

夜中、虻田町に行き、被害状況を確認し、泥流排出対策を協議した結果、自衛隊の出動を要請して排出することにし、地下に装備されていた高額な電子制御器機などが無傷で搬出できた。

その後、旧レジャーセンターでバスターミナルに転用されていた建物に、火山科学館を移転させ、規模を大きくして再公開した。

再公開に温泉街の商工業者らが期待していたことから、わずか6カ月での移転は、関係者にとっては大変な苦勞であった。

そんな苦勞が町長に伝わったのか、町長より「まだ何か面白い考えは無いだろうか？」と問われ、「面白い考えですか？」と返答すると、「今日は札幌に帰らずに、助役や課長などを交えて放談会を

開くことにしましょう」との誘いである。同僚は先に札幌に帰ってしまい、筆者は人質と同然な立場となった。

### ★三人寄れば文殊の知知恵

放談会での話題の中心は、「如何にしたら、虻田町を訪れ洞爺湖温泉を利用してくれるか」であり、様々な提案が話されているのをじっと聞き入っていると、町長が「大方の提案はどこ町でもやっている感じだが、そこで一つ」と、こちらに矛先が向けられた。

うつむき加減で、「有珠山の噴火を再現するとして、実際の山頂から花火を連打したらどうか？」との提案をした。数名から「なるほど」との声があったが、山頂は危険なので立ち入り禁止であるとのことから、「では、湖の中島から花火を上げてはどうか？」との提案をした。すると、「花火は非常に高価であるから無理かも知れない」との意見に対し、「まとめ買いすると一個当たり安くなるのが常だし、中島という固定位置では環境庁が困るであろうから、モーターボートを移動させて上げれば、花火の拡がりも出るのでは」と前進的な意見を付して提案した。

その後、町は商工会などと協議し、花火を打ち上げることを決定し、最初は1週間、そして2週間と延長するうちに、1カ月、3カ月と延ばし、ロングランと称し、洞爺湖の夏イベントとして成長し、今や洞爺湖といえば花火と呼ばれるくらい知名度を保っている。



#### profile

#### 亀谷 隆 かめや たかし

1943年函館市に生まれる。武蔵野美術大学卒業。公立中学校教諭、市立函館博物館、北海道開拓記念館に勤務し2006年退職。北海道大学、北海道東海大学講師を歴任。現在、北海学園大学講師(博物館学)、特定非営利活動法人公共環境研究機構理事長、北海道博物館協会会員、北海道北方博物館交流協会評議員、地域文化開発研究会主宰など。

#### 谷口 二郎 たにぐち じろう

1932年富良野市に生まれる。北海道大学文学部卒業。北海道庁に勤務し1990年退職。約30年にわたり北海道の自然や生活道具などをモチーフとした版画制作の活動を続けている。